

アフガニスタンで命をつなぐ

村上 優

ペシャワール会会長／Peace (Japan) Medical Services 総院長



1984年、中村哲医師はパキスタン北西辺境州ペシャワールの病院に赴任、ハンセン病根絶計画に注力します。当時はソ連侵攻後にアフガニスタンより逃れてきた300万人を超える難民医療に携わることになります。アフガン難民となっていた医療者を組織して現在のPMSの礎となる医療チームを作り、1990年にはアフガン国内の山岳無医地区に診療所を創設しました。その活動地域は元来「医療など皆無」なハンセン病多発地帯で、その根絶を計るためには、その地に出向いて医療を提供する以外になかったのです。中村が活動した40年間、アフガニスタンは、ソ連侵攻、内戦、欧米軍の侵攻と、常に戦時中だったのです。

地球温暖化の気配が色濃く押し寄せ、7000メートル級の錚々たる峰が連なるヒンズークッシュ山脈も万年雪が年を追うごとに減り、氷河も崩落し、これらを源にする山間の川の水がなくなり、徐々に干ばつが進行していきました。2000年以降は、大干ばつを原因とする飢饉が広がり、人々は戦争だけでなく食糧難民となって逃れました。当初、中村は命の水を求めて1600本の井戸を掘りました。2003年からは大河のクナル河から水を得る灌漑用水路工事を始めました。以来、灌漑用水路の事業は試行錯誤を繰り返し、10年後にはマルワード用水路が全長27kmに達して完成しました。その成果を見た住民の依頼を受けて次々とクナル河に10か所の取水堰を作り、結果として16,500ヘクタール、65万人の農民を養う沃野が復活しました

2018年には『アフガン・緑の大地計画 伝統に学ぶ灌漑工法と甦る農業』を刊行、このテキストを下にPMS方式灌漑事業のガイドライン、マニュアル作成が企画されましたが、道半ば2019年12月4日に亡くなりました。その後多くの関係者が中村の経験と精神を宿し、中村が撮った写真を使用して2021年末に完成させ、これらの著書は英語・ダリ語・パシュトゥ語に翻訳され、アフガン国内で活用されることとなります。日本の伝統工法を基に開発したPMS灌漑事業が、いつの日かアフガン全土に広がることを願っています。

中村は、人口の90%を占める農民や遊牧民などの貧しい人々のための復興を夢見ていました。「健康で命があること、三度、三度のご飯が食べられること、家族と一緒にいられること。これ以上の望みを持つ人のほうが少ない」と。飢餓による死、戦争での死を多く見てきた中村がたどり着いた心境でしょう。

2021年8月15日タリバン政権が復活した後も、中村がそうしたように、PMS/ペシャワール会は医療・農業・用水路事業を継続しています。PMSの活動しているナンガラハル州では緑が繁っていますが、一歩外れると大規模な干ばつが広がっています。2021年春にWFP（国連世界食糧計画）も警告を発し、アフガニスタン国民の半数は飢餓、870万人は餓死の危険があると報じました。米国を中心とした国際社会はタリバン政権に経済制裁を課しています。

2015年に中村が次のように述べています。「水が善人・悪人を区別しないように、誰とでも協力し、世界がどうなろうと、他所に逃れようのない人々が人間らしく生きられるよう、ここで力を尽くします。内外で暗い争いが頻発する今だからこそ、この灯りを絶やしてならないと思います。」

